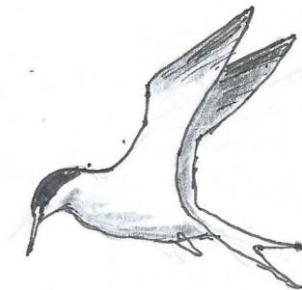


# 第1回ふれあい自然観察会

## ようこそコアジサシ ペア

盛一昭代（千葉市）



日時：2014年6月21日（土）

場所：検見川浜

参加者：18名（大人14名、子ども4名）

指導員：6名（田島、小橋、岩沢、佐藤一、八木、盛一）

ヨットハーバー側の礫浜に張られたロープを目ざして、海辺の生き物とたわむれ、時には海岸林に入って涼みながら歩くのが常であった。だからコアジサシが見られなくても、大潮の日を設定して、干潟が見せる浜のにぎわいがたくさんのプランクトンを産み、イワシのエサとなり、コアジサシがダイビングをして捕る想像の翼を広げる事で、家族連れも一応満足して下さると思っていた。今年は事もあろうに小潮の日を一方的に指定され、悲痛な思いでのぞんだ下見の日、ロープ上に旋回しながらキリッ、キリッと威嚇するコアジサシを見た。10日後の本番までたった1つがいのペアは元気に滞在してくれた。

フィナーレは、参加者に望遠鏡で抱卵している1羽と、上空で護衛しながら飛び回っているスマートなイケメンをお見せする事が出来た。スタート時は、潮が満ちて打ち上げられたイソガニの脱皮殻を拾い、フンドシで雌雄を見分ける方法やアマモの切りはずしに付着した貝の卵と、貝に穴をあけるツメタガイの卵のうを比較した。砂浜では、実がふくらんでいるハマヒルガオの群落に、ハマボウフウやコウボウムギが以前より増えている。護岸の斜面に多肉化したオカヒジキやツルナがあり、胡麻和えを試食して頂いた。埋立て前の幕張の海岸林の植生を模した公園林は、日照や塩、砂混じりの強風に耐え、風倒木と化しているが、さらに最前線のロープ内で、コアジサシは子育てをする苛酷な運命にある。

2003年よりこの地で集団営巣を始め、2005年には県下で最大の繁殖数を記録。標識をつけたヒナがオーストラリア方面で発見されるなど、長距離の渡りが証明された。この数年千葉市でコロニーが見られなかつたのはさびしい。カラス説、猫説、嵐説、人間が環境を奪っている可能性も大きい。

実施後6月末に、ロープに近づくと14羽が旋回し、海上でホバリングをしてはダイビングをくり返していた。夕陽に映える集団は、力強く、頼もしかつた。また数日後楽しみにして出かけると、あたりに生臭いにおいがたちこめ、海はコバルトブルーに変色していた。青潮で、ハゼの死骸がたくさん打ち上げられていた。ウミネコの群が50羽位ミャーミャーと鳴き、波に浮かんでいたが、あのコアジサシの姿はどこにもなく、

ロープ内にカラスが居を占め、シロチドリが汀との間を往き来していた。

8月になり、もうロープも取り払われている。これからは、南へ帰るコアジサシの集合場所になるそうだ。時には、2000～3000羽、飛び立つ姿が9月初めまで見られたら、「環境を整えて待っていますから、来春もまた来て下さい」とお願いしよう、可能性を信じて…。

